山陽スピリット ニュース　No.41

2026(令和8)年10月20日

発行：学校法人　山陽学園　山陽スピリット推進室

卒業生と母校をつなぐ

～同窓会事務局の活動について～

山陽学園大学・短期大学の同窓会事務室が、D棟1階100号室にあるのをご存知でしょうか。同窓会事務局は、卒業生と母校をつなぐ窓口として大きな役割を果たしています。事務局のお二人に、お話しを伺いました。

同窓会事務局について

Q: 自己紹介と、同窓会のお仕事を教えて下さい。

森本: 昭和60年（1985年）短期大学・幼児教育学科卒業の森本法子です。

大屋: 短期大学・国際教養学科の1期生として平成2年（1990年）卒業の大屋和実です。森本さんと私の2名体制で同窓会の事務全般を行っています。

森本: 事務局は年間を通して、同窓会会報「花水木」の作成・発送準備、年1回開催される総会パーティーの準備・運営をしています。その他、大学祭ではボランティアの皆さんと一緒に毎年「花水木家のお団子」を出店。2008年より始めて以来、食物栄養学科（現：健康栄養学科）卒の同窓生考案の秘伝のレシピを元に黒みつの材料も、団子の粉も一から調合し、生地を捏ねるところから全て手作りなので長年、変わらぬ出来立ての味は大好評です。売上金は寄付しています。卒業時の「花水木賞」の授与や同窓会入会記念品なども手掛けています。その他、役員会、親睦旅行の企画・運営を行っています。通常は週2回勤務し、2人で調整しながら進めています。

大屋: 事務局の一番重要な仕事は「同窓会名簿の管理」です。退職された教員も含め1万数千人以上のデータを厳重に管理させていただいています。しかし、転居や留学生の帰国によって不明者の増加が課題となっています。会報発送後に宛先不明で戻ってきた方へ電話で確認もしています。連絡いただきやすいように、会報にも変更ハガキを添付していますし、同窓会のホームページからもお知らせいただけるよう問い合わせフォームもあります。

森本: また、同窓会関連の資料の保管も行っています。卒業アルバムもその一つです。平成17年～21年（2005年～2009年）頃は、大学の製本版卒業アルバムが作成されず、CD-ROMなどで対応された時代もありました。広報誌「学報」の創刊号からのバックナンバーをファイル化しているほか、周年記念誌や歴史資料（130年史など）も整理し、貴重な記録として大切に残しています。

大屋: 他にも、在学生への支援として、春の祭りでの学生・教員への飲み物提供支援、学食ランチの経済支援を実施しています。唐揚げ定食などの人気メニューの価格の一部を、協助会と協賛して負担しています。学生が気軽に利用できるよう、券売機では最初から割り引いた価格で販売されています。



同窓会総会・パーティー



親睦旅行





大学祭「花水木家のお団子」

学生時代の思い出

Q: 学生時代はどのように過ごされましたか。

森本: 短大時代の2年間は、本当に楽しかったです。一番記憶に残っているのは、当時、体育館の階下にあったピアノ練習室でレッスンに励んだことや、幼稚園、保育園、施設での実習が大変だったことです。平井の丘の祭りでクラスが一致団結して優勝賞品の果物かごをもらい、皆で喜び合ったことも懐かしい思い出です。

大屋: 私は新設されたばかりのピカピカのD棟で学ぶ国際教養学科の1期生として入学しました。様々な高校から学生が集まり、フレッシュな環境でした。向上心に溢れた雰囲気の中、全国から集まった優れた教授陣、ネイティブの先生方に囲まれ、英語を中心とした課題・論文作成など、レベルの高い充実した学びを通じて、国際的視野を身につけることができました。就職活動の際も、新しい学科の魅力について誇りを持って面接官に説明したことを覚えています。学友会の一員として学校行事の運営に走り回ったことも、その後の自分に大きく役立っています。

山陽スピリット

Q: 学園のスピリットは、卒業後、どのように活かされていると思いますか。

森本: 2人とも山陽女子高校出身ということもあって、今も上代淑先生の日々のおしえ「日めくりカレンダー」は心に残っています。

〝広い空のように豊かな心〟（31日）

などのフレーズが、ふとした時に思い出されます。現在もお昼の1時に構内で放送されている「学園歌」も非常に印象深いです。3番の歌詞の一節にある

♪学びしみさお　洗いしこころ
わが身のはえの　ためにはあらず
広く世のため　はらからのため♪

という言葉が日々の行動や考え方の原点として活かされています。

同窓会活動との出会い

Q: 同窓会活動や事務局に参加されたきっかけについて教えてください。

大屋: 役員の方とのつながりから声をかけていただいたのが一番のきっかけです。私たちからも、同窓会の行事に参加やお手伝いいただいた方などと徐々に深くかかわるようになり、「役員として一緒にやりませんか」と声をかけることもあります。卒業してから年数が経ち、子育てが一段落したタイミングで戻ってこられる方が多いですね。

同窓会の今昔

Q: 短大と大学の同窓会は、最初は別々でしたね。

森本:同窓会発祥となる短期大学同窓会初期の昭和46年～48年（1971年～1973年）は、1期生～3期生の卒業生や教職員の方々が大変なご苦労を重ねて立ち上げて下さいました。大学同窓会とは、看護学部が新設された2009年（平成21年）の春から統合し、同窓会事務を一緒に運営するようになりました。

大屋: 昔と異なり、役員をはじめ同窓生の皆さんは大半が、お仕事をされているため、平日に役員会や行事を開催することが難しくなり、日曜日などに移行しています。今後の後継者探しも課題の一つだと思っています。

活動のやりがい

Q: 同窓会活動をしていてよかったことは？

森本：昭和46年（1971年）に短期大学の1期生が卒業してから同窓会も今年で55周年を迎えました。創立当時の様子や、初代学長の上代晧三先生の思い出を語って下さる大先輩方から、卒業したばかりの20代の方まで幅広い世代が参加しています。世代や年代が大きく異なっていても、同じキャンパスで学び、共通の思い出を通じて交流が深まることが大きな魅力です。

同窓会活動のこれから

Q: 今後の同窓会活動の目指す姿や展望についてお聞かせください。

森本・大屋: 大学・短期大学と同窓会の情報などを発信し続け、卒業生が母校を忘れず、同窓生であることを誇りに思えるような同窓会を目指して、今後も活動を続けていきたいと思っています。

インタビュー：山陽スピリット推進室(中野香)